
とが

大八 弥生丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とが

【Nコード】
N3177BA

【作者名】
大八 弥生丸

【あらすじ】

『サトル』

出会い系サイトを始めて三年。端正な顔付きを武器に、女を騙しまくる。しかしある日、己が騙されてしまう。

「ない！ 俺の男として大切なものが……ない！」

果たしてサトルのなくしてしまったものとは――！？

『眞奈』

十七歳の純粋な少女。しかしあることを理由に、裏社会に身を埋めている。素性のわからぬパートナー、ピヨ彦に抱く小さな恋心。その行方。

二つの恋の錯綜。

恋愛ミステリーです。

エブリスタでも投稿しています。

SCENE 1 サトル

男という生き物は唐突に発情する。

晴天の霹靂のように、前触れなどない。

教室、電車内、歩行中、ありとあらゆる場面で燃え盛る。

この日のサトルもそうだった。

それは、突然やってきた。

『三月二十八日』

今日がその日であることに気付いたのは、パチンコ帰りのことだった。

車の運転中に、ラジオ番組のMCが日付を言ったことにより、思い出した。

すでに自宅アパート付近まで戻っていたサトルは、慌ててハンドルを切り、車をUターンさせた。

『頼むから残っててくれ』

そう思いながら、アクセルを踏み込んだ。

目的の場所へは、五分後に到着した。

ウィンカーを点滅させ、たいして速度も落とさずに、店の駐車場に侵入する。

まるでスタントのように、空いている駐車スペースに一発駐車した。

少し斜めになっているが、別に構わない。

エンジンを切ると、それと同時にドライブシートを飛び出した。

店の入口に向かって一目散に走りながら、後ろ手でキーレスエントリーのボタンを押し、車に鍵をかける。

間もなくして、店内へと繋がる自動ドアをくぐった。

店内でも、迷わず走った。

疎らな人々をスルリと交わす。

すぐに新作コーナーが見えてきた。

足を踏ん張り、急ブレーキをかけ、素早く目配せする。

『あつた！』

最後の一本だった。

サトルはレンタルケースを手に取り、さらにその中に入っている、DVDディスクの入ったケースを抜き取った。

ケースには『アリス』とタイトルが打たれている。

話題になった映画で、今日がレンタル解禁日だった。

会計で支払いを済ませると、今度は真っ直ぐにアパートに戻った。

急いでシャワーを浴び、髪も乾かさずにテレビをつける。

借りてきたDVDディスクを、デッキに挿入すると、間もなくして、予告編集が始まった。

その間にコーヒーを煎れ、部屋を暗くする。

ソファアに座り、じつくりと近日公開予定の映画もチェックしたところで、本編が始まった。

映画の内容は、到って純粋なものだった。

主人公の少女がある日きりかぶの中に落ち、そこに広がる幻想的な世界で旅をする、というものだ。

卑猥な内容ではない。

にもかかわらず、サトルは本編が始まって十分も経たぬうち、性的興奮を感じていた。

ブロンドに青い瞳、透き通るような白い肌。

西洋風の白いドレスをたなびかせるその姿は、何かの精霊、と言われても信じてしまいそうだ。

主人公の少女が、魅力的過ぎた。

サトルは少女にばかり見とれた。

完璧な少女の振る舞いが、余計に性欲を刺激する。

純粋なものほど、サトルは壊したくなる傾向にあった。

映画の内容は、ちつとも頭に入ってこなかった。

繰り返し繰り返し、少女のリアルな生活について妄想を膨らませた。

この少女だって役者であるから、現実の世界では、それなりに恋をしたり、淫らな行為を行っているはずだ、と思ったりした。

やがて収集がつかなくなり、結局一時間も観賞しないうちに、サトルはデッキの電源を落とした。

しかし停止ボタンを押したところで、興奮は収まらなかった。

股間の辺りが、ゾワゾワしている。

どこか、はけ口が必要だ。

そう思ったサトルは携帯を手にし、電話帳を開いた。

『絵里子』というメモリを表示し、通話ボタンを押す。

電話はすぐに繋がった。

「これから会えない？」

開口一番にサトルは言った。

『これから！？』

驚いた声が返ってくる。

「うん。無理？」

『無理じゃないけど……飲み会の最中なの』

確かに、ガヤガヤとした雑音が、受話器の向こう側から聞こえてくる。

「今すぐ会いたい」

サトルは言った。

絵里子は少し迷った様子だったが、すぐに、わかった、いいよ、と返ってきた。

「私も会いたい」

「じゃあ三十分後に、いつもの場所で」

『わかった』

携帯を閉じると、髪型だけ整えてアパートを出た。

スウェットにトレーナーという服装だったが、夜だから別に構わない。

現在の時刻は午後九時頃だ。

再び車に乗り込み、キーを回した。

ギアをドライブに入れ、人間精器は爆走する。

待ち合わせ場所には、予定より十分も早く着いた。

そこはコンビニの駐車場で、すでに絵里子が待っていた。

助手席のドアを開き、乗り込んでくる。

「急に会いたいなんて言うもんだから、驚いちゃった」

絵里子は紺色のスーツに身を包んでいた。

髪は後ろで束ね、いかにもキャリアウーマン、といった雰囲気醸し出している。

仕事が終わって、そのまま飲みに行っていたのだろう。

絵里子は携帯のショップ店員だ。

「会いたかったから。迷惑じゃなかった？」

一応、という感じでサトルは言った。

やりたかった、とはもちろん言わない。

飲み会を中断して会いに来てくれたのだろうか、一応は氣遣う素振りを見せる。

「全然。私も会いたいって、言ったでしょ」

それから海岸に出る道に向けて車を走らせた。

コンテナ埠頭の一端に車を止め、止めた瞬間、サトルは絵里子に襲い掛かった。

タイトなスカートを捲り上げ、パンストと下着を剥ぎ取る。

インストールし、腰を振りながら、映画の少女の顔を思い浮かべた。間もなくして、サトルは果てた。

果てたサトルは、絵里子の胸に顔を埋めた。

まだ収まらぬ息使いの中、脱力する。

はあ、とようやく収まった性欲に、一息ついた。

そんなサトルの頭を、絵里子は撫でた。

「ねえサトル」

ん、とだけサトルは言った。

「私達って、どういう関係なの？」

その質問を聞いた瞬間、荒かった呼吸がピタリと止まった。

何回目だろう？

この質問をされるのは。

といっても絵里子に言われたのは、これが初めてだった。

言われてきたのは、これまでに関係を持った女性達に、だ。

「最高の関係」

サトルは答えた。

「そう言う意味じゃなくて――」

「わかってるよ」

遮って言った。

「……絵里子のこと好きだよ。付き合いたいと思ってる。だけど、もう少しだけ待ってくれないか？ 知ってるだろ。俺の過去」

絵里子は何かを言いかけ、口を閉じた。

止めていた掌を動かし、再びサトルの頭を、優しく撫で始める。

『前に付き合っていた彼女に浮気された。だから、女を信用出来ない。付き合うのが怖い』

それが絵里子に話したサトルの過去だった。

絵里子だけではなく、これまで関係を持ったすべての女性に、そう言ってきた。

だが、作り話だった。

サトルは浮気されたことなど一度もない。

少なくとも、自分が知っている範囲では。

衣服を身に纏い、帰路を辿った。

溜まっていたものを出したおかげで、すっかり興奮は収まっている。

絵里子を自宅近くまで送り、そこで下ろした。

帰り際、好きだよ、と絵里子は言った。

俺も、と返してキスをした。

「また会える？」

「もちろん」

言いながらサトルは、この女もそろそろ終わりだな、と思っていた。

都合がいいのは確かだが、本気になられると面倒くさい。

その前に関係を絶つのが、サトルの流儀だった。

そろそろまた新しい女が必要だな、

そう思いながら、夜の国道を走り抜けた。

絵里子が死んだのは、その三日後のことだった。

交際相手と口論になった末、刺し殺されたらしい。

女性のニュースキャスターが、そう言っていた。

絵里子に彼氏が居たことは知っていた。

サトルが付き合ってくれるなら別れるからと、よく口にしていたからだ。

だからもしかしたら、そんなことが理由で、口論になったのかもしれない。

だが別にどうでもよかった。

終わりにしようと思っていたし、ちょうどよかった。

携帯を開き、絵里子のメモリを消去した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3177ba/>

とが

2012年1月8日06時50分発行